

シボ族文化変容試論

丸 山 孝 一

A Preliminary Study on Xibe Culture Change

Koichi Maruyama

キーワード：少数民族 文化ラグ 文化変化 通時的研究 文化力学

Key Words: minority group, culture lag, culture change, diachronic study, culture dynamics

本論の構成：研究の視点

シボ族の概略

西遷節の意義

西シボの社会と文化

東シボの社会と文化

考察：少数民族としての文化変化の兆し

研究の視点

言語、宗教、民俗習慣、そして常にそうであるとは限らないが、多くの場合、同じ所に居住する人びとが、祖先（*1）を共有すると信じ、その結果、自分たちは同じ仲間であると意識するとき、その人びとは自らを他と区別して、自らの集団に特定の名称を付け、一つの民族としてのアイデンティティを持つことになる。中国にはそのような民族が漢民族を含め56種類公式に認定されており、本論で取り扱うシボ（錫伯）族もその中の一つである。

民族の定義の中に、共通の言語や共通の宗教、それ以上記のような同族意識、即ち共通の祖先を持つということとを条件とする見解は多い（*2）が、有名なスターリンによる民族の定義（1954）では、居住地を共有すること、つまり地縁集団であることを民族の基本的属性の一つと規定している。しかし、民族を地縁集団の一つと考えるならば、たとえば全世界に分散居住するユダヤを民族と考えることはできないということになる。

本論で取り扱うシボ族は、18世紀後半、政治的軍事的事情によって、その一部が中国東北地方からは遙か西域の新疆ウイグル自治区に強制移住させられ、その後ほぼ200年間、相互に関係しあうこともほとんどないままに今日に及び、現代になって、国勢調査に臨み、それぞれにシボ族を名乗ることになった。それは単に民族的アイデンティティが覚醒されたと言うのみならず、東北地方の原郷と出先の新疆とで、それぞれ自らの民族性に目覚め、さらに互いに東北と新疆とで同一民族としての同胞意識が芽生えたという事実に注目したい。一民族が清王

朝によって分断され、中華人民共和国によって再び同一民族としてのアイデンティティを回復したことの意義は大きい。シボという小さな民族は、清王朝、中華人民共和国という二つの性格が全く違う「国家」によって分断され、再び一体化されようとしているのである。

本論では、このようなシボ族の歴史過程を、少数民族とナショナリズムとの関わりとして扱い、一つの国家の内部における少数民族とその文化の問題として考察してみたいと思う。（なお、本論では、便宜上、東北地方のシボ族を「東シボ」、または「東シボ族」と称し、新疆ウイグル自治区に移住したシボ族及びその子孫を「西シボ」、または「西シボ族」と称することにする。これはむろん、本稿のみにおける仮称である。）

次に、この間の問題点を簡単に整理してみよう。

- (1) 少数民族が分裂したことの歴史的意味
- (2) 東西各シボ族と周辺各民族との関係
- (3) 東西各シボ族の生活史、文化過程
- (4) 今日における各シボ族文化の現状比較
- (5) 各シボ族における民族的アイデンティティの比較
- (6) 今日におけるドミナントな民族集団との関連
- (7) 民族教育の機能についての再考
- (8) 民族文化の興隆、持続、衰微、再生過程の観察、記録及び分析

本論は本質的に少数民族論である。少数民族論とは、所詮民族関係論である。少数民族をそれ自体の内的関係としてのみ論じることは、事実上意味がない。少数、あるいはマイナーであることは、畢竟相対的概念の中でのみ意味を有しているからである。したがって、シボ族の問題は、関連する諸民族、特に隣接する漢民族、満族、ウイグル族、カザフ族等との関連なしには論じることが出来ない。特に、少数民族としてのシボ族は、ドミナント勢力（*3）としての漢民族との関連において大きな歴史的意味を有してきた。

本講での問題点は、少数民族シボ族が、清王朝の支配下において二つに分断され、遠く東西3500キロの距離に

離されて以来約240年、現代に及んで再び一つの民族としてのアイデンティティを回復するに至った歴史的過程をシンクロニックな文化変動論として論じようとするところにある。東シボでは周辺のドミナントな漢民族文化に吸収、同化されて伝統的な文化の独自性をほとんど喪失してきたのに対し、西シボではこの2世紀以上に及ぶ期間、四周を異民族に取り囲まれ、しかも彼らがイスラム教徒であったため、かれらと通婚関係を持つこともなく、いわば純粹培養にも似た内婚の繰り返しのなかで、シボ族文化を持続することに成功してきた。東シボではいったんは喪失してしまったかに見える民族文化を回復する兆しが見えるが、現時点ではまだその先は見えない。他方、西シボでは長年、民族文化を維持してきたにもかかわらず、近年、漢民族との接触が増え、それは単に量的に増大したと言うばかりでなく、文化接触の量的拡大が文化の質的变化を呼び起こしていると言える状況が起ころうとしている。

このような民族文化の本質を揺るがせるような事実を目の当たりにして、本論では民族文化の変容とはどのような状況下において生起するのかを観察し、現在解っているところのみを記述して、なお資料の収集をすすめて行きたいと思う。その意味で本研究は進行中であり、本論は中間報告的な問題提起である。あえて「試論」と題する所以である。

シボ族の概略

最近の調査によると、シボ族の人口は表1にまとめられたように増加傾向にある。特に1982年から1990年にかけて2倍以上に急増しているが、これは自然増と言うより、政府による少数民族優遇政策（*4）にも影響された社会増と見るのが妥当であろう。

表1 シボ族人口の増加(中国民族統計年鑑2000)

年 度	人 口
1953	19,022
1964	33,438
1982	83,683
1990	172,932

興味深いことに、82年から90年にかけてシボ族全体としては2倍以上になっているが、実は増加分のほとんどは東シボのものであって、この間、西シボでは「3万多」（*5）とほとんど変化していないのである。濃厚なシボ文化を保持し続けた西シボは隣接する異民族がイスラム教徒であったため、彼らと通婚することもなく、ほぼ一貫してシボ族のみの内婚を続けたので、子どもの帰属も自ずからシボ族でしかあり得なかったが、東シボでは他の民族（多くは漢族であると思われる）との通婚によって生まれた子どもの民族性を1964年、1982年の国勢調査までは通婚相手の民族名を名乗ったが、1990年に

なって少数民族の優遇措置が魅力となって、あらためてシボ族として登録することになったため、表1のような水ぶくれのような膨張現象が起こったと見るのが出来よう。しかも、増加した東シボの真の民族的アイデンティティはかなり水増しされた薄い観念的なものでしかなかったと言わなければならない。これに対して西シボでは、通婚をしていないため、水増し登録をしようにも、その方法がなかったのである。そのため、人口は自然増も社会増もなく、3万人余りでしっかりと濃厚な民族文化を保持してきたのである。

シボ族の歴史を考えると、満族に特有の八旗制度について触れないわけにはゆかない。清朝の康熙帝はシボ族を八旗組織の中に編成し、北辺の警備に当てさせた。弓術を以てならずシボ族の武力に注目したもののようである。八旗制度は満州族の軍事、行政、社会制度であり、単に武力のみを強調するのではなく、文にも重きを置いた。この制度は同時に科挙制度とリンクしており、一般には過当競争の弊害が指摘されるが、他方では学問による出世志向性の機会をシボ社会に提供したことで注目したい。これは、西シボの歴史においても意味を持っていた（*6）。四書五経等の漢文は満語に翻訳され、これがテキストであった。このようにしてシボ族は満語になじむことになったようである。

シボ族は弓術の使い手として知られている。本来、農業の他に狩猟をしていたが、これが弓術を武術として洗練化した。弓術と共に馬術も得意で、男女とも子どもの頃から訓練した。シボでは「一馬三箭」と言って、百歩走るうちに3本の矢を放つ早業をほめた。このようなシボ族の得意技は、八旗の軍事活動の中で発揮された（*7）。特に西シボの場合、防人としての役割から出発した弓術、馬術はその後、アーチェリーとして国際基準に合致したスポーツに発展し、シボ族選手は全国選抜選手としてオリンピックでも活動した。

シボ族の宗教は基本的にラマ教とシャマニズムである。このほかに、シリママなどの民間信仰もあるが、文化大革命では否定されたため、現在では西シボでも消滅寸前の状態である（*8）。ラマ教の寺院（廟）は東西共にある。東シボでは、瀋陽市内に太平寺というかなり大規模の寺院があるが、これも1982年に再建されたものだといふ。西シボではチャプチャルに古く1780年に靖遠寺を建立した。これは4000名が東北からこの地に到着してわずか15年後のことである。その信仰の熱心さが判る。1864年、戦火に焼けたが、1891年に改修工事に着工し、1896年に竣工した。しかし、これも文化大革命で無残に破壊され、しばらく放置されていたが、近年になってシボ民俗風情園という民俗博物館のような施設が出来て、その一角に靖遠寺が収められた。仏像や仁王像も安置されていたが、政府の資金で宗教施設を作るといふのも新しい動きとして注目される場所である。

西シボの社会と文化——東シボとの連続性

西シボ、すなわち新疆ウイグル自治区察布査爾（チャブチャル）錫伯（シボ）自治県に集中して居住するシボ族については、これまで随所で論じてきた（*9）。ここでは、特に東シボとの関連で西シボの存在意義を考えてみよう。

西シボにとっては、過去240年の間、約3500キロ離れた東北地方の故郷は生活目標の拠り所でもあった。東シボとの社会文化的連続性は今日でも多くの面で見ることが出来る。

シボ族は、前記のように、清の八旗制度に編成されていたが、これがチャブチャル定着後に基本的な村づくりの枠組みとなった。八旗とはもちろん一種の屯田兵制度であるが、軍民両面で大きな影響があった。1765年、瀋陽から烏哈里克城（今日の伊犁霍城县）に到着後、半年間休み、シボ軍民は一〇箇隊に編成された。その後伊犁に到着後、六牛録に再編成された。シボ族は家族ぐるみであるため、伊犁將軍は伊犁河南岸のチャブチャル地区の開墾をさせたのである。定着直後に、荒地を耕し、2年間で1万畝（*10）以上の農地を開墾して、少なくとも自分たち自身の食料を確保することは出来た。この地は以前「寧西」と呼ばれていたが、1954年にこれを察布査爾（チャブチャル）と称するようになった。シボ語で豊かな穀倉という意味である。行政上も、察布査爾錫伯自治県と認められた。

さて、シボ族の一行が伊犁地区に到着した後、正確に人口調査をしたところ、瀋陽からの行軍の途中、参加した人、生れた人を合わせて700名余りが増えたことが判った（*11）。そしてこの人口の実態に即して、再び二牛録を増やし、本来の八牛録になった。各旗に一牛録があり、これが軍事組織の単位であり、同時に生活集団の重要な単位でもあった。八旗はもちろんそれぞれに旗があり、第一牛録は鑲黄旗（*12）、第二牛録は正黄旗、第三牛録は正白旗、第四牛録は正紅旗、第五牛録は鑲白旗、第六牛録は鑲紅旗、第七牛録は正藍旗、第八牛録は鑲藍旗であった。このうち、一、三、五、七の各旗が左翼をなし、二、四、六、八が右翼をなした。

このような八旗組織は、軍事組織であると同時に行政、生産と共に三位一体の組織であった。軍事的には、伊犁到着後まもなく、地域の情勢不安のため、次々と出兵命令が出た。嘉慶3年（1798）には18歳から23歳までの青年160戸、658人を選んで補充兵とした。1820-28年の張格爾の乱や1830年の玉素甫の乱においては、清政府が数百人の兵を派遣して鎮圧させているが、この時の人命損失を補うため、シボ族への派兵依頼がきている。道光14年（1834）、シボ族は再度補充兵100戸、621名を派遣した。これで2回合計260戸、1279名が徴兵されたことになる。これはさすがにシボ社会の構成そのものに大きな打撃を与えるものであった。

アヘン戦争（1840年）の影響は、中国西端のこの地にも及び、旧ロシア帝国との間で領土の割譲問題で緊張が続いた。さらに1864年、ちょうど西遷の100年後のことであるが、新疆各地に農民蜂起や農民戦争が勃発した。その背景に、シボ農民がひどく困窮状態にあったという事実があったが（*13）、同時に隣国ロシア帝国との確執から、1871年、伊犁地方はロシアに一時占領された。また、当地を巻き込んだ三区革命（1944）は当時の国民党との闘争で、シボ族はこれに全面的に巻き込まれ、約150人のシボ族青年が「シボ族独立騎兵連」を組織して活動するなど、軍事的にも貢献するところがあった。それは少数民族が中国共産党の運動に求心的に関わる過程でもあった。

シボ族のこのような活動は、結局、中国が全国レベルでの危機に直面したときの少数民族シボとしての反応であった。この過程でシボ族は積極的に国家事業に関わり、その理由によって国家及び他の諸民族からは、「独自の一族集団」とみなされるようになったのであるが、一少数民族の活動が国家の統一に機能したと言えると同時に、その時シボ族独立騎兵連のような、共産党勢力一般としてではなく、「シボ族」としての行動をとっており、このことによって、戦闘という形での国家的事業への参加しながら、その一単位としての民族集団の存在意義を主張したことになると言えるであろう。それは、しかし、シボ族が他の民族と同様に、従来の八旗制度の中に組み込まれ、それに沿って民族集団が国家機構の一部として機能していることを意味している。

八旗制度に関して、更に触れておきたい。前に八旗はそれぞれ行政単位としての牛録を持つと述べたが、具体的には各牛録が村落としての空間配置を持っていた。各牛録は戦闘単位であり、経済単位でもあった。新中国成立前には、各牛録には約200から300戸の住民がおり、牛録の周りは荒地が広がっている状態であった。中国建国後は人口も増え、現在は一牛録に400戸から500戸の住民が住んでいる。

注目すべきことには、各牛録の周りには城壁がめぐらされていることで、高さ5~6メートル、幅約4メートル、長さは4~6里（1里は500メートル）の土塼で、その上を歩くことも出来た。しかし、そこに木を植えて視界をさえぎるようなことは禁じられていた。今日、チャブチャルで、そのごく一部分が残っているのを見ることが出来る。これを見ると、かつての八旗の実態を垣間見ることが出来るし、牛録自体は今日でも地域区分の一単位として機能しているので、そこに清朝時代以来綿々と続いた軍事行政制度のなごりを理解することが出来る。

シボ族は清潔を好み、一般に屋敷の中などよく整頓されている。屋敷は南北に長い四角形が多く、周囲には各種の樹木を植え、花壇を作るものが多い。現在の住宅はコンクリート製の四角い平屋建てが多く、なぜか水色のペンキを塗ったものが目に付く。しかし、清代以降の伝

統的な屋根は傾斜が急で人型をしていた。これは満族の伝統を汲むものであったが、これは廃れて今は見られない。

シボ族は西方を好むので、西の部屋に高齢者を住ませる。祖父母がいなければ、そこには父母が住むことになる。最もシボ族的な特徴を示す建築様式は火炕（オンドル）である。これには西炕、南炕、北炕がある。南炕には祖父母または父母が寝るし、北炕には客が寝る。西炕では一般に眠らず、大事な客が来たとき、そこに座ってもらう。家族と一般の客とは西炕には座ることが出来ない。そこには仏像を具えるからである。この種のオンドルはもう見られないが、一般の火炕はなお存在する。家屋の建築様式には絶えず流行があるが、オンドルだけは今でも廃れることがない。東シボから引き継いだ伝統文化のもっとも明瞭な象徴的なごりの一つである。

東シボの社会と文化

さて、西シボの原郷である東シボの実状はどうか。既に述べたように、シボ族人口17万余のうち、約14万人以上は瀋陽を中心に東北地方各地に分散して住んでいる。この数字だけを見れば、シボ族の中心は誰が見ても東シボだと思うし、歴史的に西シボは東シボからの分派であるとなれば、シボ族の歴史的人口的重心は東シボにあることは疑いようがないと思うであろう。しかし、中国におけるシボ族の一般的な扱いは、西シボに中心があるようである。たとえば、中国で権威ある民族関係文献の一つ『中国大百科全書<民族>』によると、その条目分類目録でシボ族は〔東北・内モンゴ地区〕（そこには満族、朝鮮族、赫哲族、蒙古族、達斡爾族、鄂温克族、鄂倫春族などが分類されている）の中には入らないで、〔西北地区〕（そこには維吾爾族、カザフ族、塔塔爾族、回族などが分類されている）のなかに分類されている。また、鄧小平直筆の書名をもつ田曉岫主編「中華民族」（1991）においても同じ扱いである。

こうみると、人口は少なくとも西シボの比重が大きいことが理解される。その理由は、たとえ人口は多くても、東シボは民族としての基本条件である民族文化を十分に保持しているといえるか、との基本的な疑問があるからであろう。これに対し、西シボは上記の通り東シボの分派であるとはいえ、かなり忠実に伝統文化を保持し続けており、東シボが失ったものを持っているという強みがある。そこで、シボ族の民俗学者などは、西シボ居住のチャプチャルへ行って調査をするという。

満族は興味ある民族である。かつて清朝を興し中国全土を支配する政治的軍事的勢力を獲得しながら、彼らは都を瀋陽から北京に移し、次第に漢文化に同化していった。そして今日、本来の民族文化を、その言語、風俗習慣を含めて、ほぼ完全に喪失してしまった。この満族と歴史的に、また社会文化的に密接に関係するシボ族が、

言語を失い、民族的アイデンティティを喪失するという現象が起こった。これは東シボ族が満族の轍を踏んだということになる。

東シボに関する調査は現在進行中で、まだ十分な資料の収集が済んでいないが、われわれは東シボ族の人口が比較的集中している地点を求めて瀋陽市を訪問した。そこは1764年4月18日、約4000名の錫伯族が結集し、新疆へ向けて出発したところである。特にその中でも新城子区北西部の興隆台錫伯族鎮、黄家錫伯族郷、石仏寺錫伯族朝鮮族郷の3カ所が錫伯族の居住地域として有名である。新城子区849km²には30余万人が住んでいるが、その内14種類の少数民族が含まれている。その中で、錫伯族は約3万人である。これはチャプチャルの錫伯族人口にほぼ匹敵すると同時に、新疆ウイグル自治区以外に居住するシボ族約14万人中の約21パーセントを占める。

さてこの東シボ族の人びとがどのような日常生活をしているのかについて探ろうとしたが、特別顕著な特徴が見られなかった。瀋陽市におけるわれわれの現地調査が極めて短期間のものであったため、東シボ族の普段の行動様式を十分把握することが困難であったが、関係文献からそのような資料を探ろうとしても、実態を把握することが出来なかった。おそらく東シボの生活実態の中に、伝統的な民族としての風俗習慣が残存していると考えられるが、これは次回の現地調査から探求する他はない。

ところで、新城子情報網というインターネット（*14）を見ると、シボ族の中で特に教育改革に熱心であるとか、知名士が多数出ているというような記事があるが、しかしこれらは決してシボ族特有のものではないし、シボ族特有の行動や文化が見られない。ということは、一面でシボ族の人びとはそれだけ中国文化一般の中にうまく溶け込み、適応しているという証拠だともいえるし、またある一面では守るべき伝統文化を保持していない証拠であるとも言えるであろう。

近年、東シボでは、対西シボ関係に関して、次の二つの変化が見られる。

- (1) 伝統文化へのあこがれ
- (2) 西遷節の取り込み

固有の言語、文字、宗教を喪失してしまい、これを回復しようとして様々な試みがなされようとしている。たとえば、新城子区役場に新しいシボ民俗資料館が造られようとしている。政府は少数民族文化の多様性を原則として許容しているし、そのため少数民族としては自分たちの特徴を掲げ、民族の誇りを回復しようとしている。その際、西シボは格好のモデルになるし、事実チャプチャルから2名の小学校教師（夫婦）を招いて、新城子区内の小学校で民族文化の伝達使命を果たしつつある。

西遷節はいまやシボ族全体の民族的行事になっている。チャプチャルの西シボ族は毎年4月16日に年中行事として西遷節を実施している。西シボにとって、この日は民族としての祖先たちが東シボから出発してきた記念すべ

き日であるから、最大の年中行事として祝賀するのは当然と思われるが、なぜ原郷東シボでこれを祝うのか。同胞が別れていった日を、西シボで祝っているから追従しているように見える。他に東シボ独自のものはないのか。つまり、東シボとしては、西遷節が自らのアイデンティティを確立するための象徴的手段であり、これによって長年冬眠していた民族的自覚を呼び覚まそうとしている。55の少数民族はそれぞれに何らかの民俗行事を持っており、シボでもこれを振興する手段として西遷節はもっともふさわしい機能を持つものと考えられた。

上記した資料館はまだ建設途中であった（*15）が、その中に展示されようとしていたものは、3年前に行われた西遷238周年記念大会に用いられた展示用パネルや展示品等であった。つまり、東シボにとって西シボは、単なる分家とか同胞という以上に、240年前から持ち続けた民族の文化を維持し、目前にその証しを示してくれる、そのような憧れにも似た存在であったと言えよう。

考察：少数民族としての文化変化の兆し

東シボのこのような変化はどのように解釈出来るのだろうか。東シボを含む東北諸民族は近代化の過程の中で大きく変わった。それは清末から建国後の今日までの激しい動きの中でナショナリズムが揺れ動き、これに少数民族が翻弄される過程であった。

ところが、国家が安定期にはいると、国家は却って少数民族に多少の柔軟性（またはゆとり）を許し、少数民族優遇政策さえとる。強固なエスノセントリズムよりは柔軟な多文化主義の方が対外的な当たりもいい。東シボ

が民族文化への回帰をしようとしているのも、このような少数民族の文化のふるさと志向性を示していると言えよう。東シボは漢民族ないし中国ナショナリズムの動きに同調しすぎていたかのように、ごく近年になって、これに対する反動として、伝統文化を想い出し、これへの回帰をしようとしていると言えよう。

これに対して西シボでは、清の時代から王朝ないし国家に振り回され、戦争にかり出されたり、農民蜂起に影響を受けて翻弄されたが、自らの祖先から受け継いだ生活様式を守り続けてきた。東シボがこれを見て、民族文化の原型とし、これをモデルにしようとしているようにみえる。もちろん東シボと西シボの間には同じシボ族と言っても240年の間における歴史的事情が異なるし、周辺の新民族との関係性が全く異なる。したがって、東シボが西シボを見て民族的アイデンティティの根拠とすることには若干のねじれがあるし、無条件で済むことではない。西シボの場合、周囲にたまたま異文化、異宗教の異民族がいたため、通婚が不可能であり、その結果として伝統文化が保存できたと言える。

しかし今日、西部大開発の波に乗って大勢の漢民族が新疆ウイグル自治区へ押しかけてきた。漢民族は東北地方でそうであったように、シボ族との結婚に際して宗教的タブーのような基本的障害はない。最近（2004年）チャブチャルの伊犁師範学院で聞いたところでは、烏魯木齊や伊犁などの都会でおこなわれるシボ族の結婚100組のうち約40組はシボ族以外（特に漢民族）との結婚であると言う。シボ族と漢民族との組み合わせであれば、生まれた子どもは漢文化の影響を大きく受けるであろう。シボ族の長老たちは若い人びとの配偶者選択のしかたおよ

図 錫伯族西遷のルート（1764—65年）



び子どものしつけの方法に対して悲観的であった。

このように、漢文化に同化した東シボはその反動で伝統文化に復帰しようとしているし、伝統文化を保持してきた西シボは漢民族と触れあった結果急速に伝統文化を手放し、漢文化へ同化しようとしている。このような東シボと西シボの動きは急であり、しかも事例として稀である。しばらくこの動きを注視していきたい。

【注】

- * 1 構造的に単系出自、即ち父系または母系の親族組織をもつことが民族形成の重要な条件の一つであり、さらにその中の共通祖が存在することが、より直接的な前提となる。双系出自の場合もあるが、その場合の世代遡及度は当然浅いものにならざるを得ない。世代遡及度が深くなれば、その始祖ないし開祖は人間世界を超えて、動物などの異界と交叉することが珍しくなく、その因果関係は神話によって説明されるのが普通である。
- * 2 たとえば、「文化人類学事典」(1987)や綾部恒雄編「民族とエスニシティ」(1985)など。
- * 3 少数民族またはマイノリティ民族の対概念として「ドミナント」という用語を用いる。少数民族とは、もちろん少数派であることが多いが、本質的には数量概念ではなく、政治的、経済的に被支配的な立場に置かれた人々のことであって、多数派でありながらマイナーであることもある。時として、女性が十分な権利を認められていない場合など、「マイノリティ」と呼ばれることがあるのも、その表れであるし、南アフリカの黒人も、多数派でありながら、マイノリティ、あるいは少数民族と呼ばれることがあるのも同様である。
- * 4 たとえば、少数民族地区に住む少数民族は一人っ子政策のなかでも例外扱いをされ、また高等教育機関への進学に特別の便宜を図られるなどの特典を持つ。これに魅力を感じて、たとえば漢民族と少数民族との婚姻によって生れた子どもを、漢民族としてではなく少数民族として登録する場合が少なくないと思われる。
- * 5 集 1999:64
- * 6 丸山 1992:29-30
- * 7 瀋陽市民委民族志編纂弁公室編 1998:258-259
- * 8 1990年代初め頃、西シボが集中して住んでいる新疆ウイグル自治区察布查爾(チャブチャル)錫伯自治県に住むある盲目の老婆は、シリママが出来なくなって夫が死んだ、自分が視力を無くしたのもシリママが出来なくなったからだと言っていて涙を流して嘆いた。その時、シリママの道具(祭具)はあるかと問えば、文革で全部なくした、と言っていたが、2年後に訪ねると、うちにもあるよ、と言っていて、2、3軒の家からその祭具を持ち寄って見せてくれた。しかし、それを積極的に使用している様子ではなかった。
- * 9 たとえば 丸山 1992、2000、2005a、2005b など。
- * 10 1畝は6.667アール。
- * 11 修 1996:7
- * 12 鑲とは縁取りするという意味。
- * 13 この点については、以前触れたことがある(丸山 1982:32)
- * 14 <http://lncx.com/xbzwh/xbpd/xydxbz.htm>
- * 15 2005年9月現在

【参考文献】

- 賀靈主編 1995「錫伯族百科全書」新疆人民出版社
- 修克力 1996「錫伯族」新疆美術攝影出版社
- 修加・博雅・奇車山編 1990「錫伯族研究」新疆人民出版社
- 修加・慶夫 1999「西域錫伯人」新疆大学出版社
- 瀋陽市民委民族志編纂弁公室編 1988「瀋陽錫伯族志」遼寧民族出版社
- 国家民委経済発展司、国家統計局国民経済綜合統計司編、2000「中国民族統計年鑑」、民族出版社
- 集宝華 1999「察布查爾錫伯自治県」新疆人民出版社
- 田曉岫主編 1991「中華民族」華夏出版社
- 石川栄吉他編 1987「文化人類学事典」弘文堂
- 丸山孝一 1992「マイノリティ教育民族誌方法論(2)——伊犁錫伯族における民族教育の歴史的背景」『九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設紀要』第43号 25-40ページ
- 丸山孝一 2000「シボ(錫伯)族」『世界民族事典』弘文堂
- 丸山孝一 2005a「文化的境界領域に立つ少数民族の文化過程——特にシボ族の場合を中心に」丸山孝一編著『民族文化の境界領域に関する文化力学的研究』平成13-15年度科学研究費補助金(課題番号13571019)研究成果報告書 1-21ページ
- 丸山孝一 2005b「錫伯文化の時間と空間——錫伯族の原郷を訪ねて」『シルクロード』15号 18-19ページ
- スターリン、J. 1956「民族問題とスターリン主義」全書刊行会訳、国民文庫社